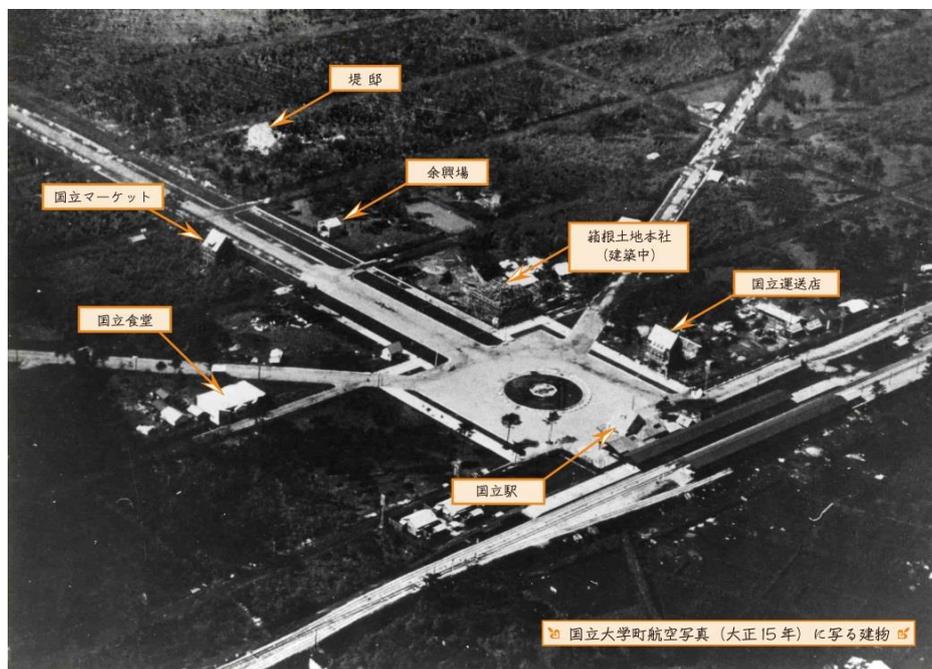




たであろう宣伝用のものです。掲載写真のうち、今回は「国立の或る商店」（国立運送店）を紹介したので、今回は「国立の或る住宅」と題された建物を紹介します。

この住宅は、東京商科大学本科（現在の一橋大学西キャンパス）の北側に建てられていたもので、箱根土地の実質的な経営者であった堤康次郎氏の邸宅でした。



館蔵：国立大学町航空写真（大正15・1926年）を加工



『国立分譲地区画図』（大正15・1926年）を加工

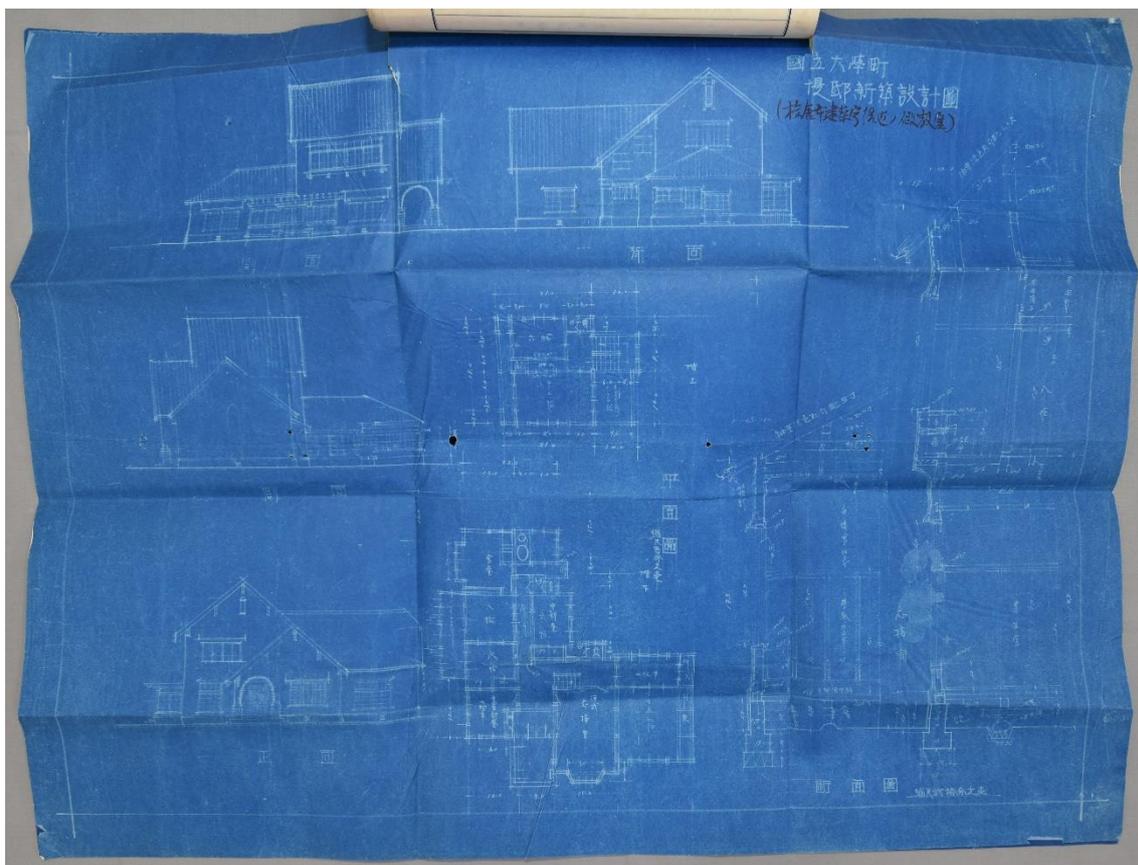
絵葉書の宣伝文で、「さてこれから図の様な各商店や住宅が続々出来るばかりです。」と述べていることから、箱根土地が開発・分譲する国立大学町に相応しい、見本となるべき住宅建築として取り上げたものとみられます。この住宅については、東京商科大学（現一橋大学）の大学新聞である『一橋新聞』の第32号（大正15年4月19日）で建築中であることが報じられています<sup>3</sup>。また上に掲載した大正15年5月前後に撮影されたとみられる航空写真（国立大学町航空写真）<sup>4</sup>では、ある程度建築が進んでいる（あるいは完成している）状況を窺うことがで

<sup>3</sup> 『一橋新聞』第32号（大正15年4月19日）2面「さくらと共に国立駅開通す 次第に目鼻のついて来る本学移転地の都市計画」で、「本社と、社経営の日用品マーケットと、堤社長の邸とが目下建築中」とあり、箱根土地本社と国立マーケット、堤邸が建築中であることを報じています。

<sup>4</sup> 航空写真の撮影時期については、2回目の展示資料紹介（<https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/>）『赤い三角屋根』誕生一国立大学町開拓の景色-2/）で検討しました。

きます。前回紹介しました大正 15 年 4 月 1 日から国立大学町で開催された「住宅建築博覧会」。この博覧会における実物展示と関係して建築された住宅ではないかとみられますが、『一橋新聞』が報じるところに拠ると、4 月初めの段階ではまだ完成していなかった可能性が考えられます。

堤邸については、『国立大学町 堤邸新築設計図』とする青焼き図面が、国立学園小学校の設置認可願に添付されて遺存しています（資料 2）。この図面には、正面・側面・背面の立面図、1・2 階の平面図および断面図が描かれており、堤邸の詳細を窺うことができる貴重な資料です。



資料 2 国立大学町 堤邸新築設計図 大正 15（1926）年頃 東京都公文書館所蔵

国立学園小学校の設置認可は、同校の設立者である箱根土地の堤康次郎氏によって大正 15 年 3 月 10 日に申請されており、同 31 日には認可が下されています。その設置認可願に付属する書類のうち、「増築予定計画書」と題された中で、「大正十五年開校当時建築間ニ合ヒ兼ヌル場合ハ別紙付属図面ノ通り本校建築場付近ノ（設立者堤康次郎）住宅ヲ以テ仮教室ニ充当ス其ノ使用期間約壱ケ月ノ予定ナリ」と記されています。「別紙付属図面」にあたる資料 2 には、裏面に「設立者堤康次郎邸宅（本校舎建築完了迄使用ノモノ）」との朱書が、表面に「校舎本建築完結迄ノ仮教室」との墨書が加えられています。国立学園小学校の校舎が完成するまでの仮教室として堤邸が用いられることが予定されていたことが知られます。

同校が仮校舎から本校舎へと移転するのは大正 15 年 10 月 1 日<sup>5</sup>になりますが、それまでの間、堤邸が実際に教室として利用されたのかどうかはよく分かっていません<sup>6</sup>。なお、同校の開校式は大正 15 年 4 月 19 日に行われており、国立大学町で最初に開校した学校となります。



資料 3 建築中の堤邸 大正 15 (1926) 年  
明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)

ます。堤邸はその仮教室に充当するものとして申請されていたから、堤邸の完成時期を推し量るうえでこの開校日はひとつの参考となるものです。

昭和 2 (1927) 年 4 月より国立大学町へと越してきた志田次子氏は、堤邸について、「お宅のお勝手の窓下に、燃料用メタンガスを発生させるコンクリート製の大きな装置があつて、進歩的でした。」<sup>7</sup>と語っています。また、「堤さんは柔道が強かったのでしょうか。国立のお屋敷に柔道場があつて、箱根土地の若い衆に稽古をおつけでした。」<sup>8</sup>とも述べており、堤邸に柔道場が設けられていたことがわかります。ちなみに、堤康次郎氏は、早稲田大学在学時代に柔道部に所属しており、社会人となってからも柔道の修行を継続していたようです<sup>9</sup>。

<sup>5</sup> 『東京日日新聞』府下版 (大正 15 年 5 月 8 日) 8 面「国立小学校 六月中旬落成」では、「国立小学校〔国立学園小学校：引用者〕は岡本組の手で六日起工式を挙行した 同校舎は平屋建延坪百四十坪で落成は来る六月中旬の筈である」と報じられています。結果的に本校舎への移転は 10 月となっていますから、当初の予定時期よりも何かしらの理由で遅延を生じていたのではないのでしょうか。

<sup>6</sup> 大西健夫・堤清二編著『国立の小学校』(校倉書房、2007 年 3 月 20 日)には、「仮校舎は、工事現場の小屋様のもので、…入口前にテントを張ってやっと余裕ができる有様です。」(47 頁)、「校舎〔仮校舎：引用者〕は駅から五分位、大学通り際の松林の中、三間四方もあつたかというような小屋と、その前に張られたテント、全く寺子屋風の家族的な学校でした。」(106 頁)とする国立学園小学校第 2 期 (昭和 4 年 3 月) 卒業生の川島一郎氏の回顧と開校時の仮校舎のスケッチ (106 頁) が掲載されています。この内容から、堤邸が仮校舎 (仮教室) に使用された可能性は低いのではないかと考えています。

<sup>7</sup> 志田次子『くにたちに時は流れて』(朝日新聞名古屋本社編集制作センター、1988 年 11 月 11 日) 107～108 頁。

<sup>8</sup> 前掲註 7 の 107 頁。

<sup>9</sup> 由井常彦編『堤康次郎』(株式会社エスピーエイチ、1996 年 4 月 26 日) 41～42 頁。なお同書では当時

堤邸が同氏の邸宅として実際に使用されていた正確な時期を探るのは難しいところですが、交詢社が発行する『日本紳士録』に掲載された同氏の住居に拠るならば、大正 15 年頃から昭和 4 (1929) 年頃までその邸宅として使用されたと考えられるところです。



資料 4 国立駅開業祝賀会の開催日 大正 15 (1926) 年  
明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)

資料 4 は、国立駅開業祝賀会の催しのひとつとして行われた柔道の様子を収めた 1 枚。演武する右側の人物は箱根土地の堤康次郎氏。堤氏はこの年 (大正 15 年) には柔道において初段の段位を授与されています。

堤康次郎氏 職業・住所履歴

『日本紳士録』 (発行年・月・日)	職業	住所
第29版 (大正14・12・5)	衆議院議員 高田農商銀行取締役 箱根土地 (株) 専務	豊多摩郡下落合575
第30版 (大正15・11・28)	衆議院議員 箱根土地 (株) 専務 東京土地 (株) 取締役	北多摩郡谷保村国立大学町
第31版 (昭和2・9・28)	衆議院議員 箱根土地 (株) 専務 小田原電気各 (株) 取締役	北多摩郡谷保村国立大学町
第32版 (昭和3・7・28)	衆議院議員 箱根土地 (株) 専務 高田農商銀行 小田原電気各 (株) 取締役	北多摩郡国立大学町
第33版 (昭和4・6・15)	衆議院議員 東京商工会議所議員 箱根土地 (株) 専務	北多摩郡国立大学町
第34版 (昭和5・5・25)	衆議院議員 東京商工会議員 箱根土地 (株) 専務	芝区白金三光25
第35版 (昭和6・5・15)	衆議院議員 商工会議所議員	荏原町上大崎405
第36版 (昭和7・6・1)	衆議院議員 商工会議所議員	荏原町上大崎405

※：上記一覧は当館の中根が調査・作成したものに基いています。

の早稲田大学柔道部について、「この当時の柔道部の部員は約四〇〇名、うち有段者は約三〇名、日本の大学でも随一の規模と実力であった。」(42 頁) と述べています。



資料 5 完成した堤邸 大正 15 (1926) 年 明窓浄机館所蔵 (中島陟資料)

なお、箱根土地が国立大学町に先行して開発・分譲した郊外住宅地である目白文化村には、国立大学町へと移る前の堤氏の邸宅が所在していました。そこでは「彼れ〔堤康次郎氏：引用者〕の邸宅が府下下落合にある所から、主なる社員を悉くその付近に住はせて、毎朝時間と場所を定めては、自分の自動車を廻はして一同を収容し、彼れが監督の下に打ち揃ふて出勤する。夕刻も朝と同様に一同を自動車に乗せて共々に帰宅する。」という出退勤の様子が語られています<sup>10</sup>。箱根土地は、その本社と社員住宅を国立大学町内に建築しています。国立の堤邸においても、前述のような出退勤の光景が繰り広げられていたのでしょうか。そのようなことを想像しながら資料を眺めると、また違った面白さを感じられます。

**【もうちょっとしつこく資料の解説です】**

さて、ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。まだ余力のある方へ向け、もう少し資料の解説をしてみます。「くどい！」との声が聞こえてきそうですが、めげずに、お構いなく進めてまいります。

資料 1 の写真が掲載されている絵葉書の宣伝文。前回の展示資料紹介で「分譲地を廉価販売することを述べています。」としていた部分は、こんな宣伝文になっています。

<sup>10</sup> 加藤結『新代議士名鑑』（国民教育会、1924年7月17日）322頁。



上の資料 6 の部分拡大で青線の囲みのところでは次のように記されています。

「何故斯くの如く廉価を以て分譲するかといふに、

- 第一、 五十万坪の広大なる面積が此等の建設費を負担するので、一坪当りの経費が僅少となること
- 第二、 会社は土地を買ひ入れ居住する方々により周囲の土地が騰貴する結果を生ずるのでその利益分配の意味に於て実価以下で譲渡をなすのであります。」

廉価分譲の理由について、第一では広大な面積の開発により坪当りの経費が僅少となる点を、第二では後日の土地騰貴を見越した利益分配として安値で譲渡する点を述べています。

どうでしょうか。この第二の内容をみると、資料 1 にある宣伝文がこれと同じことを述べていると感じられはしないでしょうか。

「絶対有望の国立の土地を廉価に売出し皆さんの自然的協力を俟つて共存共栄の主旨を実現致し度い」とは、国立の土地を安く売り出し、多くの人々が購入することで需給バランスによって地価が上昇する（「皆さんの自然的協力」、これにより購入者の資産価値が上がり、またデベロッパーたる会社側も高い利益を収めることができる（「共存共栄の主旨」、これを実現したい（だから皆さん買ってください）と謳っているものと捉えられませんかでしょうか。資料 6 の直接的な文言に比して、資料 1 は婉曲な表現になっていますが、宣伝している内容は同じことを言っているようです。

上記の第一・第二からなる宣伝文は、既に大泉学園都市の第 2 回土地分譲の新聞広告でほぼ同じ文言がみられます<sup>12</sup>。また大泉学園都市の後に分譲された国分寺大学都市の広告でも同趣のものが用いられており<sup>13</sup>、さらに国立大学町の分譲においても使い回されている箱根土地お得意の売り口上なのです<sup>14</sup>。

箱根土地の宣伝文には、美辞麗句を並べたり、巧みな表現を用いたりしたものが数多く見られます。分譲案内や広告などから箱根土地の巧妙なる宣伝活動の一端を探ってみると面白い発見があるものです。ただ、以前にも申しましたが文字が小さくて読みづらいものが多いのですが…。

【2020.04.30：中村記】

<sup>12</sup> 『東京朝日新聞』（大正 13・1924 年 11 月 5 日）7 面「大泉学園都市第二回土地分譲」。

<sup>13</sup> 『東京朝日新聞』（大正 14 年 3 月 3 日）4 面「国分寺大学都市土地分譲」など。

<sup>14</sup> 箱根土地が作成した国立の分譲広告でも早い段階のものとみられる『国立の大学町鳥瞰図』（大正 14 年頃）に同趣の宣伝文が見受けられます。